

平成 25 年度中学校武道授業（柔道）女子指導法研究事業



駒木研究者による投げ技指導の実践報告

平成 25 年度中学校武道授業（柔道）女子指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館・（公財）全日本柔道連盟・日本武道協議会〕は平成 26 年 3 月 1 日～2 日の 2 日間、東京都北区にある味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて実施された。今年度本事業では、11 月に柔道の部（4 回目）を行っているが採用校が最も多い種目であること、他関連事業が男性スタッフ中心に動いているが現場は教員、生徒とも女子が多いことなどを考え、特に女子に特化した指導法研究会を初の試みとして行った。

■1 日目（3 月 1 日）

開講式では尾形敬史全日本柔道連盟教育普及委員長に続き、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が主催者挨拶を行った。



開講式後さっそく研究協議に移り、はじめに尾形研究者から本事業の概要について、「全日本柔道連盟でも学習指導要領の改訂に合わせ、必修化対策チームを結成した。柔道の醍醐味である投げ

技が新聞報道により授業で実施できなくなっている学校もあると聞く。柔道を教えるのではなく柔道で何を教えるかが重要である。3 本の柱として①資料（ハンドブック）の作成、②研修会・講習会の活用、③外部指導者の活用があげられる。相手を投げること、相手に投げられること、受け身をとること、相手に受け身をとらせることを通じて人間性を豊かにすることが目的である。柔道は素晴らしいということ伝えるため、よりよい指導法を検討する事業で

ある。指導法は人の数だけあっても目的は 1 つでなければならない。色々な分野から研究者が集まっているのでしっかり情報交換してほしい」と説明があった。

引続き、研究者により実践報告が行われた。

駒木研究者からは「受け身は投げられているというよりも自ら取る能動的動作である」と指導して恐怖心を取り除くようにしている。体落の足の動かし方の説明では、視覚情報で畳の線を使用すると生徒が把握しやすい。釣手の動きについては手首を立てるという動作が難しいので猫手にならないように親指を立て自分に「イエイ!」と向けてくるイメージと生徒に説明している。また引き手は時計を見るように「今、何時?!」と掛け声をかけながら実践すると生徒も飽きずに授業に参加してくれる。動作にオノマトペ（擬音語）をつけることで体の使い方の共通イメージを持てるように工夫していると発表があった。

また、灰原研究者からは童謡「雪」のリズムに合わせて行う体さばきの実践報告があり、女性ならではのダンス感覚で基本動作習得のため工夫を紹介した。体さばきもゲームの要素を加えると授業で生徒に楽しんでもらえる。



以上の実践報告を踏まえ、検討協議を行った。宮本研究者から「女子生徒への指導は個人学習よりもグループ学習が有効である。以前、鮫島先生から『教えることと教えきことは違う』と指導いただいた。

生徒が考える余地を残すため、技の指導も最低限にしている。女子生徒はグループ学習を通じて、相談・工夫し上達していった」と実体験を報告した。



また、今回指導法研究事業に初参加した上野研究者から「女子柔道選手から見た心理的特性」というテーマで体験談を語ってもらった。「競技柔道と教育柔道の違いに戸惑っている。現役時代は勝利至上主義にとらわれ、柔道を好きと思ったり楽しんだりしたことはなかった。自分自身にできる事は試合で勝つこと。それで周りの人が報われると思い、必死だった。『精力善用』や『自他共栄』は引退してから感じた。指導者という立場になり、選手とコミュニケーションをとるのが大変で、何を話しかければいいのかわからなかった。若い選手は五輪を目指して(三井住友海上の柔道部に)入部してくるがメンタル面で非常に打たれ弱く、注意することで落ち込んでしまう」と話した。オブザーバー参加の薪谷氏からも「最近の選手は本当に打たれ弱い。代表としてやっていく覚悟が足りない」とメダリストならではの体験談を聞くことが出来た。

■2日目(3月2日)

研究協議では谷井研究者から「授業は男女共修で行っているが男女差が大きく、技の指導もどこまで完成度を求めているかわからない」という質問に、尾形研究者から「体格・体力を見極めるのは難しいがそれが教員の役目。生徒に合った到達目標を設定してあげることが重要」と助言した。その後、鮫島研究者の「安全指導」、磯村研究者の「柔道指導の手引(三訂版)の活用について」の解説があり、2日間の全日程を終了した。

閉講式では鮫島研究者から本研究事業の講評をいただいた。

《参加した研究者の声》

田辺研究者：初めてこのような会に参加したが現場での苦勞が聞けた。柔道未経験の教員が柔道を指導するのは大変だと思うが、全日本柔道連盟と講道館も協力して教育としての柔道の在り方を考えていきたい。

谷井研究者：指導書のみで授業を行っていたが他の先生達の現場の声が聞けた気がする。この研究事業で学んだことを持ち帰り、授業で生徒たちにわかりやすい授業として還元してあげたい。

宮本研究者：全力を出すことが柔道の醍醐味だと思っていた。「全力は7割」を意識して指導していきたい。また、同じ迷いを持っている教員に「人の数だけ指導法がありそれらの指導法には間違いはない」と伝えていけたらと思う。

下田研究者：柔道の魅力は直接組み合うことだと思う。自分の身を守る、相手の身を守る大切な単元ととらえ、柔道は安全で楽しいということを生徒に伝えたい。機会があればまた参加したい。



◇研究者

尾形 敬史 (全日本柔道連盟 教育普及委員長・中学校武道必修化対策チーム長)
 鮫島 元成 (全日本柔道連盟 教育普及委員会副委員長・中学校武道必修化対策チーム委員)
 磯村 元信 (全日本柔道連盟 教育普及委員会委員・中学校武道必修化対策チーム委員)
 田辺 陽子 (日本大学法学部 准教授)
 渡辺 冬花 (中学校武道必修化対策チーム委員)
 植田 真帆 (和歌山県国体推進局競技力向上推進課)
 上野 雅恵 (三井住友海上火災保険株式会社)
 駒木奈緒美 (神奈川県横浜市共進中学校)
 下田久美子 (東京都文京区立第三中学校)
 谷井 愛 (紀の川市立粉河中学校)
 灰原 茉美 (講道館指導員)
 濱名三代子 (講道館指導員)
 藤川 紀美 (神奈川県立住吉高等学校)
 宮本 乙女 (日本女子体育大学)

◇オブザーバー

薪谷 翠 (JOC柔道専任コーチ)
 ◇全日本柔道連盟事務局
 大塚 由香 (全日本柔道連盟 総務課主任)

◇日本武道館事務局

永嶋 信哉 (日本武道館 振興部振興課長)
 石井 政利 (日本武道館 振興部振興課主任)

(順不同)